<講演年月日>　2005 年 5 月 11 日（水）
<講演者>　加藤好郎氏（慶應義塾大学国際センター事務長）
<テーマ>　デジタルネイティブ時代の図書館（像）とは

<講義内容>
１．はじめに
・デジタル・ネイティブとは 21 歳以下の人。それ以外の人をデジタル・イミグラントと呼ぶ。
・デジタル・イミグラントである大学図書館員が、デジタル・ネイティブに対してサービスを展開していかなければならない。
２．World Cat の新しいサービス
・伝統的な貢献をより充実させる（メタデータと蔵書）。
・デジタルライセンスのあるコンテンツを含むように拡充する。
・メタデータを新しいタイプのコンテンツに加える。
・サーチエンジンとの効果的な統合。
・FRBR による書誌的なナビゲーション。
・Open World Cat の利用拡大。
３．米 Google の図書館蔵書のデジタル化
・ハーバード大学（４万冊）スタンフォード大学（200 万冊）ミシガン大学（700 万冊）オックスフォード大学（1900 年以前に出版された一部の書籍）ニューヨーク公立図書館
４．New York Public Library のデジタル化
・データベース化，電子ブックリンク集
・検索システムの開発
・所蔵資料のデジタル化
・研究教育用のデジタル教材の作成
・利用者のデジタル教育（電子情報のアクセス，コンピュータ利用，電子情報活用）
５．図書館におけるテクノロジーの方向性
・GIZMOS（機器）は毎年変化する。そのスピードは速い。
・デジタルネイティブと話すことによってニーズを見つける（マーケティング）。
・テクノロジーについてばかりではなく、人間の生き方について理解する。
６．変化する情報市場と図書館
・携帯電話で World Cat のすべてにアクセスできるようになる日は遠くない。
・図書館よりもインターネットを利用する人が増え続けている。
・印刷物とインターネットによる情報に対して創造的な新しい取り組みを考える必要がある。
・図書館は Google のよい点を見習うことができるだろうか？
７．変化する情報市場の中で図書館が考えるべきポイント
・まったく会うことがない利用者、時々会う利用者、いつも会う利用者、それぞれに対してサービスを提供すること。
・「マーケットシェア」という視点から考えること。
・個々のサービスに対して数量的価値を認識すること。
・すべての情報市場における図書館の役割を再考すること。
・それぞれのタイプの利用者に対する資源の分配を再検討すること。
・場所か、サービスかといった見方を見直すこと。
・多様さが融合するように内容をひとまとめにすること。
・オンライン管理システムを発展させるために、しかるべき役割を果たすこと。
・効率のよい精査された情報をいかに提供するか？→情報が溢れ過ぎている市場に対して、エントロピーの低い（解決に向かう可能性の高い）情報を流していくことが図書館の役目。